

「スピンドクターとしての IR」に関する一考察

藤原 宏司¹

概要：Volkwein（1999）がまとめた IR の役割は、概ね米国 IR の業務内容を適切に表していると思われるが、「スピンドクターとしての IR」に関しては、若干疑問の余地がある。本稿では、筆者が勤務するベミジ州立大学（BSU）での事例を挙げながら、BSU におけるスピンドクターについて、実務担当者の視点から考察する。

キーワード：Institutional Research（IR）、米国 IR、広報、スピンドクター

1. はじめに

2015 年 8 月に神戸大学で開催された大学評価担当者集会 2015²では、大学評価や IR（Institutional Research）に関する様々なテーマについて活発な議論があった。米国 IR に関するコンテンツ（大学評価に活かす米国 IR の知見）もあり、ここでは、米国における IR 人材育成プログラム等によく読まれている文献を参考に、それらが示す知見の日本への適用可能性が話し合われた。その中で取り上げられた文献の一つが Volkwein（1999）である。

Volkwein によると、IR には情報精通者（Information Authority）、政策分析者（Policy Analyst）、スピンドクター（Spin Doctor）、研究者（Scholar and Researcher）としての 4 つの役割や機能がある。各々についての詳細は、柳浦（2009）や浅野（2015）を参照されたい。これらの役割は、若干のオーバーラップはあるものの、IR の一般的な業務内容を適切に表していると思われるが、「スピンドクターとしての IR」については若干疑問の余地がある。

スピンドクターとは、情報を操作し、自陣に有利となるように世論等を導く専門家（Merriam-Webster, 2011）のことで、政治やパブリック・リレーションズ（PR）の分野で良く使われている用語である。このことから、大学におけるスピンドクターとは、学内外に対し、「大学の良いイメージ」を作り上げることを業務としている人達、と捉えることができるだろう。

では、実際に米国の IR はそのような役割を担っているのだろうか。少なくとも、筆者が勤務しているミネソタ州立大学機構（以下「MnSCU」という）ベミジ州立大学（以下「BSU」という）およびノースウェスト技術短期大学（以下「NTC」という）において、それらは IR 室ではなく広報室（Office of Communications & Marketing³）の管轄である。

そのため、本稿では、BSU/NTC の広報室による「学生の入学・履修状況（エンrollment）に関するニュースリリース」を取り上げる。IR 室がまとめたエンrollmentに

¹ ミネソタ州立大学機構 ベミジ州立大学・ノースウェスト技術短期大学 IR/IE 室 副室長
メール：kfujiwara@bemidjistate.edu

² <http://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=acc2015>

³ http://www.bemidjistate.edu/offices/communications_marketing/

関するデータを、彼らがどう取舍選択し学内外に情報発信したのか、その事例を紹介しながら「スピンドクターとしての IR」および IR の役割について、考察を試みたい。

2. BSU 30th Day Enrollment Report

IR 室では、エンrollmentに関する詳細なレポート⁴を、学期ごとに 2 回作成している。授業開始日から数えて 10 授業日目と 30 授業日目をデータの基準日としているが、中でも 30 授業日のデータを基にしたレポート（以下「30th Day Enrollment Report」という）は、学内において「ほぼ公式」な物として扱われている。MnSCU の公式なデータ基準日は学期終了 45 日後であるが、その日を待っている余裕は我々にはない。なぜなら、学生の動向を早めに把握し、次学期もしくは次年度に向けて、速やかに改善プランを策定する必要があるからである。

IR 室は、2015 年秋学期(学期開始日: 8 月 24 日)の「BSU 30th Day Enrollment Report」を 10 月 8 日付で発表し、電子メール⁵で学内の主要関係者⁶ (約 40 名) に配布した。表のみで構成されている 4 ページのレポートのため、以下のエグゼクティブサマリー⁷ (Executive Summary: 重要なポイントをまとめた要約のこと) をメールの冒頭に付記した (表 1)。なお、今回のレポートは、前年同学期 (2014 年秋学期) における 30 授業日のデータと比較している。

表 1 BSU Fall 2015 30th Day Enrollment Report —Executive Summary—

-
1. 総売上単位数は前年度 (2014 年秋学期) と比べてほとんど変化なし
 2. 総学生数は 107 名増の 5,013 名
 3. その要因は大学院生とパートタイム^a の大学生が増えたことによる
 4. 通学制^b の学生数が減っている
 5. 通学制の新入生 (741 名) と通学制の新転入生 (262 名) の数が減っている
 6. 通信制^c の新転入生数が増えている
-

^a 履修登録単位数が 12 単位より少ない大学生 (12 単位以上はフルタイム大学生)

^b BSU のキャンパスに通って授業を受けている学生のこと

^c インターネットを通じて授業を受けている学生のこと

総学生数は前年同学期と比べて 2.2% 増加した。その理由は、大学院生 (31.1% 増) とパートタイムの大学生 (11.4% 増) が増えたことにある。しかし、BSU 全学生の 7 割を占めるフルタイムの大学生が 2.7% 減ったために、総売上単位数にはほとんど変化がなかった (実際は 0.4% 減)。米国大学の授業料は基本的に履修登録単位数で決まる。つまり、総学生数の増加が授業料収入の増加に結びつかなかったのである。

⁴ 簡易なレポートは週ごとに (時期によっては毎日) 作成している。

⁵ BSU/NTC では、学内レポートの印刷物での配布は、コスト面から推奨されていない。

⁶ 学長、副学長、学部長、学科長、室長など。

⁷ IR 室では、学内レポートのほとんどにエグゼクティブサマリーを付している。

さらに深刻な問題点として、通学制の学生(BSU のキャンパスで授業を受けている学生、On-Campus Students) 数の減少⁸ (5.0%減) が挙げられる。一般的に、通学制の学生はフルタイムで学位取得を目的としているので、それらの減少は、総売上単位数に影響を及ぼすだけでなく、将来的に卒業生が減っていく可能性を示唆する。以上のことから、このレポートをまとめたとき、IR 室は今後の大学経営に危機感を抱いた。

3. 広報室による情報発信

BSU/NTC の広報室には、マスコミ対応を含む学外向け広報と、学内向け広報の2つの役割がある。大学に関する情報を、Web もしくは印刷媒体(例えば、BSU Magazine⁹)を通して学内外に発信するのが広報室の主要業務である。他、大学イベント(例えば、大学説明会)の企画運営も行っている。

IR 室が「BSU 30th Day Enrollment Report」を作成した翌日(2015年10月9日)、広報室は「Fall Enrollment at Bemidji State University Up More Than Two Percent to 5,013」というタイトルで、ニュースリリース¹⁰を発表した。2015年秋学期の総学生数が、前年度より2%増えた5,013名であったことを前面に押し出している。表2にその要点をまとめる。

表2 ニュースリリースの要点

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 総学生数は107名増の5,013名(2.2%増) 2. 大学生及び大学院生の数がそれぞれ増えた 3. 特に大学院生の増加は顕著であり、2011年以来最大 4. 通信制の学生数が増え続けている(2009年秋学期と比べて73%増) |
|---|

表1と表2を比較してみると、このニュースリリースには「学生数が減った」等のネガティブな意味合いを持つ表現が使われていないことが分かる。IR 室が指摘した、今後の大学経営における問題点(例えば、表1の5番)等は、ここでは一切触れられていない。

表2の4番を見ると、IR 室のレポートでは、「通学制の学生数が減っている(表1の4番)」としているところを、広報室は上手く「スピン」させて「通信制学生数が増え続けている」としている。結果、間接的ではあるが、順調な大学経営を思わせ、「大学の良いイメージ」の構築に貢献していると言えるだろう。少なくともこの記事を読み、IR 室が抱いたような危機感を抱く人は多くないと思われる。

BSU/NTC では、IR 室ではなく広報室がスピンドクターとしての機能を果たしている。ここで強調しておきたいのは、彼らの発表は全て IR 室が提供した事実(情報)に基づいているということである。前段落で挙げた例で言えば、学生数にあまり変化がなく、通学制の学生が減っているのであれば、その対である通信制の学生が増えているということは、

⁸ その理由は、通学制の新入生(7.3%減)と通学制の新転入生(5.4%減)が減ったことによる。

⁹ <http://www.bemidjistate.edu/news/publications/bsu-magazine/>

¹⁰ <http://www.bemidjistate.edu/news/2015/10/09/2015-fall-enrollment/>

正しいデータの解釈だと言える。彼らは広報の専門家として、「大学の良いイメージ」を提供できるようなデータを選択し、事象を解釈して情報発信を行っている、という点に留意して欲しい。

ここでは深く扱わないが、NTC においても同様のことが行われている。IR 室による「NTC Fall 2015 30th Day Enrollment Report¹¹」のデータを基に広報室が発表したニュースリリース¹²「Enrollment at Northwest Technical College up more than two percent」では、学生数が増えたことのみを取り上げ、実際の総売上単位数が前年度比 2.5%減であったことには触れていない。

4. まとめと考察

本稿では、IR 室と広報室における情報発信の実例を挙げ、BSU/NTC においてスピンドクターの役割を担っているのは広報室であると述べた。筆者は、2015 年 11 月にミネソタ州ブルーミントンで開催された米国 IR 協会 (AIR) の地方支部である AIRUM の年次大会に参加した。そこに集まった IR 関係者に、本稿で述べた「スピンドクターとしての IR」について尋ねてみたところ、他大学においても、BSU/NTC と同じくそれらは広報室が担当しているとのことだった。このことから、現在の米国 IR には、スピンドクターとしての中心的な役割は存在しない可能性が高いと思われる。

IR 室と広報室では、同じデータであっても使用目的が異なるため、発信する情報に違いがある。以下、日米問わずよく使われている「コップの水をどう見るか¹³」の例を用い、それぞれの違いについて簡単にまとめたい。

「コップに水が半分入っていた」

この事象を説明するには、「半分しか水が入っていない」と「半分も水が入っている」の二通りの表現が考えられる。スピンドクターとして肯定的なイメージを提供するのが業務であれば、「半分も水が入っていた」と解釈し、情報発信するだろう。では、IR はこの事象をどのようにレポートすべきだろうか。

結論から言うと、IR はどちらの表現も使うべきではない。我々に求められているのは事実の提供であり、解釈は受け手に任せるべきではなからうか。つまり、IR が報告すべきことはコップの容量と、その中に入っていた正確な水の量である。

IR の役割は、大学経営における問題点を早期に発見し警鐘を鳴らすことであり、発信する情報を選択（または事象を都合良く解釈）し、「大学の良いイメージ」を構築することではないと考える。客観的に事象を捉え、意思決定を支援するデータを迅速かつ的確に提供することこそが、IR に与えられた責務であろう。時と場合によって、データや解釈を使い

¹¹ http://www.ntcmn.edu/about/institutional_research/

¹² <http://blogs.ntcmn.edu/news/2015/10/09/2015-30th-day-enrollment/>

¹³ この「コップの水をどう見るか」についての例は、Volkwein (1999)、柳浦 (2009)、浅野 (2015) においても取り上げられている。

分けるのは、大学経営陣を混乱させるだけではなく、IR に対する信頼を低下させる恐れがある。これらは、日本の IR にも当てはまるのではなかろうか。

謝辞

査読者の方々には、貴重なご示唆をいただきました。深く感謝申し上げます。また、編集委員会の皆様には校正をしていただきました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

浅野茂 (2015) 「IR の 4 つの顔 (または立ち振る舞い)」大学評価担当者集会 2015 全体会講演資料.

http://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/documents/2015/acc2015/conference/h27-0827_asano_4faces.pdf

柳浦猛 (2009) 「アメリカの Institutional Research : IR とはなにか？」

<http://www.postsecondaryanalytics.com/whatisir/>

Spin Doctor. (2011). In Merriam-Webster.com.

<http://www.merriam-webster.com/dictionary/spin%20doctor>

Volkwein, J. F. (1999). The Four Faces of Institutional Research. *New Directions for Institutional Research*, 1999 (104), 9–19.

* オンライン文献および脚注にある URL の最終閲覧日は全て 2016 年 1 月 4 日である。

[受付：平成 27 年 12 月 9 日 受理：平成 28 年 1 月 4 日]